

『無名草子』と「長春花」

宮崎, 裕子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8923>

出版情報 : 語文研究. 98, pp.1-9, 2004-12-08. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

『無名草子』と「長春花」

宮 崎 裕 子

一

「長春花」とは、薔薇の一品種「庚申薔薇」の漢名であり、『邦訳日葡辞書』に

Choxun. チャウシユン(長春)一年中咲く、一種の花。

『また、この花の咲くある灌木。』

とある通り、四季を通して花を咲かせる。

この「長春花」は、現存する平安期の物語や和歌の中に用例を一切見出せないもののだが、『無名草子』には、その語りの舞台となる古檜皮屋の庭を彩る花として登場していた。

いかなる人の住みたまふにかと、あはれに目とまりて、
やうやう歩み寄りて見れば、築地もところどころ崩れ、

門の上などもあばれて、人住むらむとも見えず。ただ寢殿、対、渡殿などやうの屋ども少々、いとことすみたるさまなり。庭の草もいと深くて、光源氏の露分けたまひけむ蓬も所得顔なる中を分けつつ、中門より歩み入りて見れば、南面の庭いと広くて、呉竹くわちく植ゑわたし、卯の花うのはな垣根かきねなど、まことにほととぎす蔭に隠れぬべく、山里やまのめめきて見ゆ。前栽むらむらいと多く見ゆれど、まだ咲かぬ夏草の茂み、いとむつかしげなる中に、撫子なでこ、長春花ばかりぞ、いと心地よげに、盛りと見ゆる。

(新編日本古典文学全集 一七五―一七六頁／傍線引用者・以下同)

これは、『無名草子』の導入部、老尼が古檜皮屋へ入って行く場面で、その南面の庭に植えられた撫子と「長春花」が

盛りの時を迎えている。

『長春花』は現在では「チヨウウシユンカ」と呼ばれているが、『無名草子』の主要伝本である天理図書館本・彰考館文庫本・群書類従本のいずれも「ちやう春くゑ」と表記に至るまで一致しており、異同は見出せない。

二

この夏の庭の描写については、川島編江氏が『無名草子』の方法いとぐちの部分の虚構について「(『中古文学』第28号、一九八一年)の中で、六条院における花散里の住まいである夏の町を描写した『源氏物語』少女巻との類似を指摘されており、どちらにも「山里めきて」という語が使われ、取り上げられた草木「呉竹」「卯の花」「撫子」「薔薇」の順序も一致している。

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の陰によれり。前
近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯の花の垣根
ことさらにしわたして、むかしおぼゆる花橘、撫子、薔薇、くたになどやうの花くさぐさを植へて、春秋の木草、
その中にうちませたり。

(新日本古典文学大系 少女巻 三三三―三三四頁)

両者の表現を対照すれば、次の表のようである。

源氏物語	呉竹	山里めきて	卯の花の垣根	花橘	撫子	薔薇	くたに
無名草子	呉竹	卯の花垣根	山里めきて		撫子	長春花	

「山里めきて」という表現が、『源氏物語』では「呉竹」の後に使用されるのに対して、『無名草子』では「卯の花垣根」の後にきており、また、『源氏物語』に登場する「花橘」「くたに」が、『無名草子』には出てこないという違いはあるものの、両者に共通する「呉竹」「卯の花」「撫子」「薔薇」以上四つの植物の順序は同じである。

両者の相違点のうち「花橘」が除かれた理由については、川島氏が同じ論文の中で、次のような趣旨の事を述べておられる。

『源氏物語』において「橘」は、花散里巻および花散里本人を強く印象付ける物である。そのため、「卯の花垣根などまことにほととぎす蔭に隠れぬべく」と、能因本『枕草子』の「木の花は」の段の

卯の花は、品おとりて、何となけれど、咲くころのを
かしう、郭公の陰に隠らむ思ふに、いとをかし。

(日本古典文学全集 四四段一二六頁)

また、「見るものは」の段の

扇よりはじめて、青朽葉どもの、いとをかしく見ゆるに、
所衆の、青色、白襲をけしきばかりひきかけたるは、卯
の花垣根近うおぼえて、郭公も陰に隠れぬべうおぼゆか
し。
(日本古典文学全集 二〇三段三五〇頁)

といった叙述を踏まえて、『源氏物語』だけでなく、『枕草子』
をも連想させようとした『無名草子』では、その使用を故意
に避けたのであろうと。

もう一つ『無名草子』には採られなかった「くたに」であ
るが、それがどのような植物であったのか、現在では不明^{注1}。

はやく『古今和歌集』の物名歌 巻第十四35番歌 に詠
み込まれているが、藤原教長が治承元年(一一七七年)に講
じた『古今集註』(京都大学附属図書館蔵)では、

ハキノチヒサキヤウナルハナノハヘルナリクタントソコ
ノ心^{ノ心}コロノ人ハ申スメル

と言われ、また、建久二年(一一九一年)に成立した顕昭の註
によれば、

又或人云、クタニハ^{クダニ}トイフ虫也トイヘリ。

(『日本歌学大系』別巻四 二三八頁)

と、「くたに」を植物ではなく虫であるとする説もあり、そ
の实体は、『無名草子』が成立した頃にはすでに定かでなかつ

たようだ。そのため、『無名草子』では、この「くたに」を
採用しなかったのではないだろうか。

三

ここで気になるのは、共通する四つの植物の中で「薔薇」だ
けが、『無名草子』において「長春花」に変更されているこ
とである。この「長春花」は、前述の通り、天理図書館本・
彰考館文庫本・群書類従本のいずれも表記に至るまで一致し
ている。

『源氏物語』に関しても、少なくとも『源氏物語大成』が
扱った諸本の中には、少女巻の「薔薇」を「長春花」とする異文
は見出せない。『無名草子』が意識的に「薔薇」ではなく「長春
花」を選択したと考えられる。そこには、何らかの意図があつ
たのだろうか。

単調な模倣となることを避けたのだとしても、例えば「呉
竹」を「竹」、「撫子」を「常夏」などに変化させるのではなく、
何故「薔薇」だけを「長春花」としたのであるだろうか。

「まだ咲かぬ夏草の茂み」とあるので、夏の花である「薔
薇」の開花時期には少し早過ぎるせいなのかもしれないが、
それにしても、わざわざ前栽の中で「撫子」と「長春花」だ

けが他に先駆けて花を咲かせている時期を選んだのは何故なのかという疑問は残る。

前に述べたように「長春花」は、現存する平安期の物語や和歌の中に一切見られない。「薔薇」の方も平安・鎌倉期の物語や和歌にさほど多く見られるわけではないが、『古今和歌集』に収録された

さつび

つらゆき

我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

(巻第十 物名436 / 以下、詩歌の引用は注記しない限り全て『新編国歌大観』に依る)

をはじめとして、少ないながらもある程度の用例が見出せる。^(注)また、白居易の「薔薇正開、春酒初熟。因招^二劉十九・張大・崔二十四^一同飲」から、『和漢朗詠集』に収録された次の二句

甕頭竹葉^レ春熟 階底薔薇^レ入^レ夏閑

(『白氏文集』 卷第十七律詩 新釈漢文大系 五七頁) を典拠にしている場合も多い。^(注)

「薔薇」が古く貴之の和歌に詠み込まれているのに対して、『長春花』の初出は、通行の辞書類によれば、『明月記』建保元年(一二二三年)十二月十六日の記事だとされている。

十六日 天晴 籬下長春花猶有紅藥^{早晩不似例} 此間鶯舌頻歌
早速先春歌又白梅間開云々…

(冷泉家時雨亭叢書『明月記』三、四六二頁)

ところが、『明月記』『無名草子』と同時代の「長春花」の用例を探してみたところ、両者に先行すると思しき資料が存在した。定家が判者を務めたかと推定される『通具俊成卿女歌合』で、その判詞に「長春花」が用いられている。

左

18はれくもるそらをばしらずこのはちるおとにたもとはう

ちしぐれつつ

右

19こがらしにこのはふりしくやどなればつゆもとまらぬそ

でのうへかな

そらをばしらずこのはちる、かからんをりだに左のかちと申さまほしく侍るを、このつゆのたまらぬそでのうへ、猶とこなつ長春花などをよめらんやうにやきこえ侍るべき

をぎのうはばのかぜのおと、そこぞとききわかねど、そのふしとも侍らぬをのしのはらも、すずろにいうにいひつつけられて、よそのそでもつゆけき心ちし侍れば、まさると申すべし

この歌合の判詞に見えるものが、『新編国歌大観』全十巻における「長春花」の唯一の例である。

『通具俊成卿女歌合』は、現在、定家筆の古筆断簡が残るのみで、完本は伝わっていないが、久曾神昇氏によつて、

その草稿本らしい形態から、筆者である定家が歌合の判者であつたと推定されること。

和歌の作者名は記されていないが、この中から数首が俊成卿女作、源通具作として、『新古今和歌集』に収録されていることなどから、源通具と俊成卿女との二人の歌合であつたらしいこと。

この歌合の中から『新古今和歌集』に選出された作には、定家・通具以外の撰者が撰んだものも存在することから、撰集の資料とされたこと。

等の指摘がなされている（『仮名古筆の内容的研究』ひたく書房、一九八〇年）。

前掲の番いにおいて、左が源通具の詠歌、右が俊成卿女の詠歌で、右を勝ちと評する判詞に「長春花」の語が用いられている。ちなみに、「かからんをりだに左のかちと申さまほしく侍るを」とあることから、全体としてもこの歌合で優っていたのは俊成卿女の方であつたことがうかがえる。

この歌合の成立年次は不明だが、久曾神氏は、『新古今和

歌集』の各撰者が入集候補作の選定を終えたのが建仁三年（一一一三年）四月なので、建仁二年以前に成立したものと推定されている（前掲書）。

一方、『無名草子』の成立年次は、樋口芳麻呂氏によつて正治二年（一一〇〇年）七、八月から建仁元年（一一一一年）十一月の間と推定されている（『無名草子』の成立時期「『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』ひたく書房、一九八二年」。初出は、『袋草紙・無名草子の成立時期について 付藤原範永の没年』、『国語と国文学』第47巻4号、一九七〇年）。つまり、『通具俊成卿女歌合』と『無名草子』とは、極めて近い時期に成立したと考えられるのである。

『無名草子』の作者については諸説があり、未だ特定されてはいないが、極めて用例の少ない「長春花」が、成立時期の近接する『通具俊成卿女歌合』、『無名草子』のどちらにも登場しているという事実は、両者の間に何らかの関係があることを思わせる。

『源氏物語』少女巻を下敷きにして夏の庭を描写しながらも、『無名草子』の作者は、『薔薇』のみを「長春花」と変えて表現した。その「長春花」とは、俊成卿女にとつて、『通具俊成卿女歌合』において、判者を務めた定家が彼女の歌を通具の作と比較してより優れていると評した判詞の中で使用

された特別な言葉でもあったのである。

四

定家と通具がともに和歌所の寄人に任命されたのが建仁元年七月。同年十一月には、彼らに勅撰集撰進の院宣が下された。これはまさに、『無名草子』が成立したと推定される時期に合致している。『通具俊成卿女歌合』で、その歌才は通具に優ると定家に認められた俊成卿女の目に、一連の事態は、どのように映っていたのであろうか。

勅撰集の撰集と女性との関係について、『無名草子』で次のように語られていることは、よく知られている。

あはれ、折につけて、三位入道のやうなる身にて、集を撰びはへらばや。(新編日本古典文学全集二六二頁)

いでや、いみじけれども、女ばかり口惜しきものなし。昔より色を好み、道を習ふ輩多かれども、女の、いまだ集など選ぶことなきこそ、いと口惜しけれ…。

(新編日本古典文学全集二六三頁)

仮に、『無名草子』が俊成卿女の手によるものであるならば、ここに込められているのは、「勅撰集の編纂に携わる女性がいなのは残念だ」という一般論などではなく、「自分

より歌才の劣る通具でさえ勅撰集の撰者に任命されたのに、歌人として彼に優ると認められた自分は、女であるがゆえに、それが出来ない」という痛烈な批判とも受け取ることが出来る。

『通具俊成卿女歌合』の判詞には、「とこなつ長春花などをよめらんやうにやきこえ侍るべき」とあり、「とこなつ」と「長春花」は、少女巻の「撫子」と「薔薇」とに、その順序をも含めて対応している。この偶然の一致を巧みに利用して、『無名草子』は少女巻を引いているのではないだろうか。

「眞竹」「卯の花」「撫子」「薔薇」と並べる際に、少女巻によるものであることを気付かせるためには、重なる四種類の植物名の内二つを別の名称にしてしまつては、『源氏物語』自体の印象が薄れかねない。名称の入れ替えを一つにとどめ、猶且つ、その変更をより印象的なものとするために、いずれも歌語としての使用頻度が高い「撫子」と「常夏」との何の変哲もない入れ替えではなく、「薔薇」を目慣れぬ「長春花」に替える方を選択した。

この一見些細な変更は、その実、さり気なさを装つた俊成卿女の自己主張ではないかとも思える。

『新古今和歌集』の撰集作業が進められている時期に、あえて少女巻の「薔薇」を「長春花」に変えて、『無名草子』に

引いたのは、それが撰集資料の一つでもあった『通具俊成卿女歌合』において定家が俊成卿女の歌を通具詠よりも優れていると評した判詞に用いられたからだろう。俊成卿女は自分に対する定家の讃辞を借りて、「自分自身は勅撰集の撰者にならなかつたけれど、撰者に任せられた通具よりも自分の方が歌人としては優れている。そしてそれは、通具と同じく勅撰集の撰者である定家も認めている事実なのだ」と、おそらくは「長春花」が使用された判詞を目にしたであろう他の撰者達にも向けて高らかに宣言したのだ。女性が撰集に携わらないことへの「口惜し」さを表明した前掲の物言いと併考えれば、そこには、「にもかかわらず、女であるがゆえに自分は撰者にはなれなかつた」という皮肉も多分に含まれているだろう。「私にだって其処に連なる資格は有るはずなのに」と自身の歌才を恃む彼女は、「私が其処に居ない理由」を世に問うたのだろう。実際、『新古今和歌集』入集歌数は、俊成卿女二十九首に対し、通具は十七首で、他の撰者達にも歌人として高く評価されたのは彼女の方であるようだ。それ程の歌才をもつてしても勅撰集の編纂に携わることの叶わぬ無念さを抱く俊成卿女にとって「長春花」とは、定家という当代随一の歌詠みに秀でた詠歌力を認められた歌人としての矜持を象徴する花だったのかもしれない。

注1

注
島内景二氏は、『無名草子』の作者が『源氏物語』古注釈書の説を踏まえて「くたに」をバラ科の「長春花」に置き換え、「薔薇・くたに」を一セツトにして意識していた可能性を指摘されている。

天理大学所蔵の『河海抄』には、少女巻の「くたに」に関して、「或云、薔薇荷などいへり」という一説が載っている。『無名草子』の作者は、この少女巻の「くたに」に関する『源氏物語』古注釈書の指摘を知ったうえで、それを薔薇科の「長春華」という植物名に置き換えたものとも推測されるのである。

（『無名草子』の意義 再評価された王朝文学）「源氏物語の影響史」笠間書院、二〇〇〇年）

確かに、天理図書館蔵真如蔵本『河海抄』には「くたに」の注に

岩藤也 苦膽ト云 薔薇荷ナト云リ 古今集物名部二八ク
ダニト云書リ

とあり、更に、龍門文庫蔵本『河海抄』にも「くたに」を「薔薇荷」と言う説が記載されている。

岩藤也 苦膽といふ草ありと云々同物歟薔薇荷などいへり
古今集物名部にはくたにとかけり

だが、「薔薇荷」が必ずしもバラ科の植物名であるとは限らない。

しかも、『源氏物語』の「花橋、撫子、薔薇、くたになどやうの花くさぐさを植へて、春秋の木草、その中につちませたり」は、花橋・撫子・薔薇・くたに等の夏の花々の中に春秋の木草を混ぜ植えたという意味であろうから、必然的に「くたに」

は夏の花となり、四季咲きの「長春花」ではありえない。

飯に、『無名草子』の作者にとつて「くたに」長春花」であつたとしても、『無名草子』が依つた『源氏物語』では「薔薇」と「くたに」とを個々に扱つてゐるのだから、「薔薇くたに」を「ま」として「長春花」とするのではなく、「薔薇長春花」とする方が自然ではあるまいか。

注2

『薔薇』の用例。

・西国受領歌合

二番 薔薇 左勝

5 ことしうゑてみるがをかしさうひにさくはなのえだえだく
れなぬにして

右

6 色ふかくわきてかつゆのおきつらんけさうひにさくはつは
なの色

左くれなぬのいろふかくよめり、右はいろといふことも
とすゑにをかしてかきあやまりてけりもとすゑにことの
はをやはしたるべきくれなぬいろはふかさまされり

・現存和歌六帖

六つび

卜部兼直宿禰

133 しらずいさうびとは歌のすがたにてかみの五もじなき名と
ぞきく

正三位知家

134 はやせがはさでにはちかふいしづしをいさうひとつにまか
せてをみむ

・能因本『枕草子』草の花は

さうびは、ちかくて、枝のさまなどはむつかしけれど、を
かし。雨など晴れゆきたる水のつら、黒木のはしなどのつ

らに、乱れ咲きたる夕映え。

(日本古典文学全集七十段 一五七頁)

・栄花物語 卷第十八 たまのつてな

この御堂の御前の池の方には、高欄高くして、その下に薔
薇、牡丹、唐撫子、紅蓮花の花を植ゑさせたまへり。

(新編日本古典文学全集 三〇七頁)

注3

『白氏文集』を典故とした用例。

・和漢朗詠集 卷上夏

首夏

甕頭竹葉経春熟 階底薔薇入夏開 白

・歌仙落書

前少納言資隆 一首

風体堅き所はあれども、見所なきにもあらず、はし
の本のさうびの枝さへこそ咲きたるとやいふべから
む

紅葉をよめる

57 初しぐれふりにし里をきてみればみかきが原も紅葉しにけ
り

雪

58 霜がれの籬の内に雪ふれば菊よりのちの花もありけり

はしのもとに咲くてふ花の枝しげみ紅ふかきいろぞ
みえける

・夫木和歌抄 卷第七 夏部 一

六帖題、さうび 権僧正公朝

2334 はしのもとに紅ふかきはなのいろもなつきにけりとみゆる
なりけり

・源氏物語 賢木卷

階の底の薔薇、けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりも
しめやかにおかしきほどなるに、うちとけ遊び給。

(新日本古典文学大系 三八四頁)

・『栄花物語』 卷第十一 つぼみ花

… 薔のほとりの竹葉も末の世はるかに見え、階の下の薔薇
も夏を待ち顔になどして、さまさまめでたきに…。

(新編日本古典文学全集 三六頁)

・『堤中納言物語』 「逢坂越えぬ権中納言」

中納言まかりで給とて、

「階のものと薔薇也」

とうち誦し給へるを、若き人くは、あかずしたひぬべく
めで聞こゆ。

(新日本古典文学大系四四頁)

付記

本稿は、平成十三年度中古文学会秋季大会における口頭発表に
基づくものです。御教示をいただきました方々に心より御礼申し
上げます。

(みやざき ゆうこ・本学大学院博士後期課程)